

Eureka XI

六年制通信 No.33 令和6年1月25日(木)号

つばなれ

今年も三重中学校の入試が無事終了しました。たくさんの受験生を迎えることができて嬉しく思います。卒業生や在校生の諸君が頑張ってくれているおかげですね。これからその制服に誇りをもって、小学生が憧れる学校づくりをしてください。

さて、前期試験の折の保護者説明会でしたかな、私から受験生の親御さんに「つばなれ」の話をしたので、君たちにも紹介します。

これはもともと寄席の符丁で、私も確か『寄席の人たち』を読んで知った言葉ではなかったかと思います。客席に十人以上のお客さんが入ると「つばなれ」と言うのだそうです。客が「つばなれ」してから開演する、そんな言い方をするのですね。ちょっと解説が必要ですが、一つ、二つ、三つ…と数えて、九つと、ここまでは「つ」がつきますが、十（とお）で「つ」が離れます。シャレた表現があったものですね。十のことを「つばなれ」と言うなんて。「つばなれ」が寄席の数読みの符丁から一般にも使われるようになったのはいつ頃なのか知りませんが、教育現場でも時々見かける表現です。

明治期など、まだ日本が貧しかったころですが、子どもが小さいうちに亡くなってしまうことは珍しいことではなかったのです。当時は医療も発達していませんし薬も今のように充実していません。また、薬があっても誰にでも手に入るというわけでもなかったようです。衛生環境もよくなかったでしょうし、今のように栄養満点の粉ミルクなんてなかったはずです。従って、栄養の足りない小さい子は丈夫に育つこと自体が大変だったのですね。ですから、十歳にもなれば、これはもう立派にちゃんと育った証拠で働き手として社会に参加する、すなわち大人扱いをされるわけです。

説明会では、つばなれした子は子どもではなく大人の一人とみなす、したがって中学受験をする子には、これを機に子ども扱いを避け、大人としての自覚を促してくださいと、そんな話をしたのでした。明治のころの日本人の精神年齢と比べると、今は大人も子どもも数年は幼くなっているでしょうから、昔の十歳はちょうど今の中学一年生くらいかな。とすると、三重中学校へ入学したらもう大人だと、もう「つばなれ」した一人前の大人だと、そう自覚しましょう。親子ともに自覚することが大切です。何事も自分で解決する、人の力を借りないで自分の力で解決する、それが大人というものです。学校は小さな社会ですが、そこでは様々な軋轢が起こります。その軋轢を自分の力で乗り越えさせましょう。親はなるべく早く子どもから手を放し、目だけは離さないように我慢して見守る。我慢しないと時に良かれと思って、結果的に子どもの成長の機会を奪ってしまうことがあります。「つばなれ」したら自分のことは自分でさせる、

中学入学を機に考えてみて下さい。と、まあだいたいこんなことを話しました。

さて、ひるがえって諸君、「つばなれ」以降君たちは大人として生活をしていますかな。もちろん保護者から経済的な援助は受けるわけですが、それ以外では親の手を借りず、自分のことは自分で決め、実行していますか。いつまでたっても子どもでいることに甘んじていませんか。現代は長く子どもでいることができる時代だと言われていきます。それだけ平和で豊かということでしょうが、恥ずかしい話です。私たちの父祖の世代が懸命に働いて作り上げた今の社会は、果たして彼らの理想とした社会になっているのかどうか。まさか子どものような大人で溢れる社会を目指したわけではないでしょうから、君たち、子どもに甘んじてはいけませんよ。

今週のおすすめ

・汐見夏衛 『あの花の咲く丘で、君とまた出会えたら。』 (スターツ出版)

先週号で特攻隊のことを少し書きましたが、初めて特攻隊に興味を持ったのは高校に入るころでした。昨年末に亡くなられましたが、山田太一さんの脚本による NHK ドラマ「男たちの旅路」を観たことがきっかけです。警備会社を舞台に特攻隊の生き残りである主人公の中年男性と戦争を知らない若者たちとの交流を描いた傑作だと思います。主人公が生き死にを弄ぶ若い女を叱りとばすシーンがずっと頭に残っています。

さて、紹介の本は現代の女子中学生が終戦間近にタイムスリップをして特攻隊員と知り合う。それがプロットです。映画になっていると聞いて調べたら、主人公がブギウギのスズ子の恋人ではないですか、驚きました。本の中の中学生は映画では高校生になっていましたが、その方が信憑性がありますね。

作者は若い頃に知覧特攻平和会館を訪れ、いつか特攻隊員の物語を書こうと決めたようですね。私も今から 20 年以上も前、特攻隊員たちから母のように慕われた鳥濱トメさんのことを知り、また数冊の本を読み、車で知覧まで走ったことがあります。松阪インターから鹿児島北インターまでほぼ千キロ。そのあとまだ一時間は走ったかな、やっと着いた知覧で受けた衝撃は、明らかにその後の私の人生観に影響を与えています。当時 B コース (今の K コース) 主任をしていたのですが、修学旅行先を鹿児島に変え、生徒たちを記念館に連れて行きました。生徒たちには事前に、展示されている特攻隊員たちの遺書を読むように強く言いました。

当時の若者の中でも最も優れたエリートたち (その知的水準は彼らの字を見ればわかります) が、自ら操縦桿を握り片道だけの燃料を積んで敵艦に体当たりする。そして多くの命が失われた。彼らは狂信者ではない。彼らが守りたかったものは何だったのか。記念館には彼らの言葉と凛々しい写真が残されています。こんなに素晴らしい知性と健康を持った若者が命を懸けて守ったもの、それを私たちは大切にしているのでしょうか。私たちは彼らの思いに応じて生きているのでしょうか。いつか君たちも知覧を訪れ、考えてみて下さい。私は彼らの写真を見、遺書を読んで以来、自分が恥ずかしいような感覚がずっとあります。申し訳なく、後ろめたい気持ちもなくなりません。

BGM は モーツァルト の レクイエム でした…。